

(11) 中筋小学校

学 校 長 梅原 和砂
校内研究代表者 宮川 史佳

1. 研究主題 「主体的に学習に向かい、考えを深め合う児童の育成」 ～「やってみたい」を引き出すしかけや発問の研究を通して～

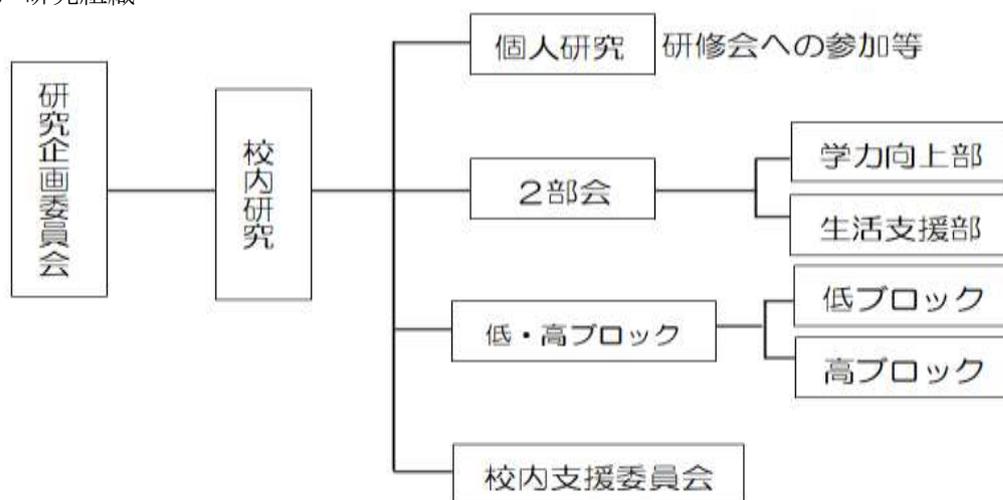
2. 主題設定の理由

本校は、令和6年度から国語科を中心とした授業改善に取り組んでいる。昨年度は、研究主題を「主体的に学習に向かい、豊かに表現することができる児童の育成～書く力を高める指導法の研究を通して～」とし、「書くこと」の領域に絞り、校内研究を進めてきた。その成果として、基礎的な内容の共通理解を図れたことで変容を見取りやすくなったことや単元構想図を作成したことで児童が見通しをもって学習を進めることが出来始めたこと、「書くこと」の単元において授業の組み立て方が理解できてきたこと等が挙げられる。昨年度末に、本校教職員全員で、国語科における児童の実態や教師が抱えている困り感について話し合いの場を持った際に出てきた課題としては、「学習意欲が低いこと」や「初見の文章を読み取る力が弱いこと」、「一問一答で、説明内容に偏った指導になりやすく、深い学び合いにならないこと」等が意見として出た。

以上のことから、今年度は、国語科の説明的な文章の読みを中心として研究を進め、研究主題を「主体的に学習に向かい、考えを深め合う児童の育成～「やってみたい」を引き出すしかけや発問の研究を通して～」とした。本質（身に付けさせたい力）が何かを明確にした上で、児童が「やってみたい」という言語活動を設定したり、一単位時間の導入の工夫を行ったりすることで、わかる喜びやできる楽しさを感じながら主体的に授業に参加する児童が増えるのではないかと考える。また、付けたい力に迫る中心発問や問い返しを研究することによって、児童の思考を揺さぶり、考えを深め合うことができるのではないかと考える。また、昨年度までの研究で取り組んできた「わかる」と「できる」を意識した単元構想図の作成は引き続き行っていく。そして、国語科の説明的な文章の学習過程でクラウドを活用し、子どもたち一人一人のよりよい学びを目指していく。

3. 研究の進め方と方法

(1) 研究組織



・研究企画委員会（2週間に1回月曜日に実施 管理職・研究主任）

(2) 校内研究の持ち方

- ・毎月3回、基本的に水曜日を校内研修の日とする。講師の都合で変更する場合もある。
- ・学力向上部、生活支援部の部会を定期的にもつ。
- ・研究企画委員会で企画立案し、校内研修で提案し、共通理解を図り実践していく。

(3) 研究方法

- ・全学級1回は公開授業を行う。
- ・全教員で全ての学年の教材研究会を行った後、学習指導案を作成し、低・高ブロックに分かれて指導案検討を行う。事後研究会の後、「全教員で取り組んでいくこと」を話し合い、次の研究授業や日々の授業に生かしていく。

◎校内研究授業

月 日	学級	単元名
9月25日	5・6年	国語 5年「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」 6年「『永遠のごみ』プラスチック」
10月1日	2年	国語 「ビーバーのひみつをつたえよう」
10月30日	3・4年	国語 3年「せっちゃくざいの今と昔」 4年「くらしの中の和と洋」
11月27日	1年	国語 「ふねのせつめいをよもう『いろいろなふね』」
1月9日	たんぼぼ学級	自立活動「読み、書き名人になろう」
	なかよし学級	自立活動「上手に言えるかな？ハンバーガー屋さんでコミュニケーション大作戦」



4. 今年度の成果と課題（成果○ 課題●）

- 漢字や音読、ノート指導など、学力を支える基盤となる力を校内で統一していることで、指導・評価するポイントが明確になり、変容を見取りやすくなった。
- 5月と12月に実施した国語に関するアンケートでは、4項目全てにおいて肯定的評価が向上したことから、「どうすれば児童が主体的に取り組めるか」を考え、「しかけ」と「発問」を意識した教材研究を行うことができた。
- 研究授業を一過性の研究で終わらせず、次の研究授業につなげたり、日々の授業につなげたりする工夫を行うことができた。
- 教師から提示する「めあて」ではなく、教師が児童一人一人の考えのズレやつぶやきを丁寧に拾い上げ、自分たちの課題としてめあてを設定できる導入の工夫が必要。
- 児童が思わず教科書を読み返したくなるような発問や文章の内容に立ち返って説明したくなるような発問の精選をしていく。
- 何を「分かり」何を「できる」ようにするのかを明確にしておき、学んだことを活用する場を設定し、「わかる」と「できる」をつなげて単元を構想していく。